

第3回（平成24年度第1回）札幌文化芸術円卓会議の発言要旨

24.4.20 札幌文化芸術円卓会議事務局

1 本日の議題について

【伏島委員長】

今日は、前回の議論を踏まえて、テーマについて議論したい。前回と今回おっしゃっていただいたことを認識論として、ある程度整理した上で、次の会議に臨んでいけばよいのではないかと思っている。

一年はあっという間に過ぎてしまうので、ずっと認識論ばかりやっているのは生産的ではない。しかし、たまには認識論に帰るときもあると思う。ふと気づいて後ろにもどってまた進むということが有効なので、当面は、次の会は進むということを前提において、御発言をお願いしたい。

伊藤副委員長は、急きょ、大学内で緊急を要する会議が入ったとのことで欠席となった。皆様にくれぐれもよろしくとのご丁寧なメールをいただいている。

今日、京都の映画の現場で大変忙しい斎藤さんが、出席していただいた。

御欠席の浅野さんからは、お手元に配られているように、大变的を絞ったアートセンターについての御発言が、A4一枚でみなさまのところに届けられている。

それでは、事務局から、資料について説明してほしい。

【事務局】

この分類表は、第2回目の会議の発言を項目ごとに分類してみたもの。項目は、例えば「質を高める」「質を高める」ための「助成のあり方」など、こういった要素を実現していくと、「市場の拡大」につながっていくのではないかという意図もあって、このような配列にしている。これは、議論の参考として、役に立てばということで作ったもの。

【伏島委員長】

このようにまとめると、項目を関係図にまとめることはできると思う。しかし実質的にはまだ一回しか議論していないので、今日の議論をいただいた上で、構造化することは別途考えて行った方がよいのではないかと思う。

それではまず漆さんに、これまでの貴重な体験も含めてお話しいただきたい。

【漆委員】

私は、コーディネーターという立場で、いままで、芸術家の方と学校であるとか、商店街とか、いろいろな場で調整役のようなことをやり続けている。単純に人と場所をつなげる、人と人をつなげるということではなくて、お金の問題であるとか、企画の内容であるとか、広報のことであるとか、後は評価の問題であるとか、そういったこともトータル的に考えながらやらなければならないことが非常に多い。どこか一つを掘り下げて自分の技術を高めて行くことができたろうかと、振り返ってみると思っているところではある。

しかし、逆に言うと、いろいろなことをやらせてもらったことによって、いろいろなことに問題意識をもつようにもなった。

一番最初の問題は、僕がやろうとしているポジションをやっている人間が世の中に果たしているのだろうかということ。いわゆる同業者はほとんどいない。アートマネジメントは、大学の学科でも出来てきているので、興味を持っている学生や若い人は多いのだが、僕よりも上の世代では、おそらく明確にアートマネジメントのプロフェッショナルとして食べている人はいないのではないか。

例えば、美術の世界なら学芸員とか、ギャラリストとかに限定してくる。劇場なら、劇場を運営している方がアートマネジメントに繋がるのかもしれない。

ジャンルを広げて行くと分からないのだが、アートの世界で、教育現場とのかけはしとなる状況を作りだそうとしている人材は、道内で見ても、余り聞いたことが無い。そういうことをミッションとしている団体も聞いたことが無い。逆にいえば、隙間産業的な意味で、ほかに担う人がいないので何かあったときには、声をかけていただける状況もある。

そういった意味で、コーディネーターの仕事は多岐に渡ると思っている。そういった分野で活動してみたいと思ってくれる人たちが、純粋に増えてくれると良いという思いを常に持っている。

そういう人たちが育つ環境、そのしくみをいち早く構築していきたいという問題意識を持っていて、自分がかかわっている小学校の現場とか、イベントをやるときには、なるべく若い学生たちを巻き込んで、インターン的な形で、現場の経験をしてもらったり、内容について一緒に考えてもらったりという機会を増やそう思い、関係機関と協力してやろうとしている段階だ。

今まで円卓会議では、質を高めるとか、アートそのものの向上という議論も出ているし、一部コーディネーターに触れていることもあったようだが、そのあたりが同時進行で進んでいくと良いと思っている。

小学校でやっている、「それって、アートなの」と言われる場合がある。作品としてのアートと、状況を生み出すことの文化活動とか交流活動と、その目的の違いや考え方の違い、質の違いがあると思う。アーティストがやっているからといって、それがそもそもアート（作品）としての質を問われるべきものなのか、そうではないのかということが、自分の中では問題意識としてある。

例えば、劇場で演劇作品を見る。それは当然、その演劇作品がどれだけおもしろいのか、クオリティが高いのかという話になるだろうし、絵画を見たら、それがどれだけのもものなのか、作品としての評価を考えて行くことがあるだろう。

僕らがやっている事業は、どちらかという、作品はけっこうこの次で、そういうものが生み出されていくとか、子供たちにそういうものに関心を持たせるまでのプロセス、そういう状況を生み出していくための環境づくりの質を高めて行きたいと思っている。北海道、札幌に限らず、地方ではどこの都道府県に行っても同じような話を聞くのだが、そういう素地が余りない、担い手がいない。

アートの質を問うたときに、作品そのものではなく、それを取り巻く状況とか、そういったところに対して、どれだけ札幌市民が関心をいだいて、自分のよりどころを見出そうとしているのかということ、仕掛ける側としてはもう一回現状認識をすべきだと思う。そこで絶望するのではなく、そこで良い方向へ持っていくために、今取り組むべきところはどこかということ、円卓会議のような機会に御意見をいただいて、何か新しい素地を作っていく、状況を作っていくためのきっかけが、新しい事業モデルとしてできるかもしれないなという気がしている。

例えば今後のアートセンターの中で取り組まれるものに対して、一つの提案になるものが、こういう機会にできると良いのかなと思っていた。

それによって、アーティストも成長するのではないか。良い作品がどんどん生み出せるのではないか。圧倒的に素材とか環境が足りない。環境があっても気づいていない。うまく生かせていないとか、そういうことはたくさんあるだろうと思う。

そういう受け皿をうまくつくってあげれば、今まで作ったことのないようなものができるかもしれない、そういう現場を何度も見てきた。そこが、たまたま小学校だったとか、商店街だったとか、普段アーティストが活動するにはそぐわないと思われるような場所かもしれないが、意外とそういうところで、人とかかわりながら何かを創作するということが、次のヒントにつながっていく可能性は十分にある。そのとき失敗してもいいのではないか、

次につながっていくのなら。それをきちんと評価してあげる。そのための新しい評価基準も、必要かもしれない。

どうしても、行政の評価や企業の評価は数字で、何人参加した、どれくらいの人 came、興行収入がいくらだった、経済効果がどうだったとか、数字でしか判断しない。それが一番分かりやすいわけだが、そういったものに落とし込めない評価を、そのとき起きたことだけではなく、いろいろなものを比較しながら、もうちょっと俯瞰して、札幌の文化というものができればよいというように、自分たちがやっているものを評価してもらえたら、もうちょっと客観性をもってやれるのではないか。例えば、ワークショップを行ったとして、その実績がどうだったかということは確かに必要だが、それが札幌の文化にどのような影響を与えるものなのかとか、評価の仕方をもう一回、検討できるといいなと思う。自分たちも事業の中で取り入れて行きたいと思う。そのような本を出せないかなと考えたりしている。

常に対極にあるものを意識して、一つ一つの問題について話が出来れば良いなと思っている。

例えば、質を高めて行く議論をする場合に、アートのことを全然知らない人のことを意識しておかないと、それが本当に意味のあることなのかということが僕も分からない。本当に質の高いアートなら、子供が観ても感動すると思いたい。子供たちにそのような機会を与えられるのだろうかとか、そういうことを常に考えて行きたい。話が一つの方向だけに行かないような議論をしたい。

【伏島委員長】

漆さんは、学校の現場という、普通のアートシーンにはでてこないが、社会全体を見た時には、とても重要な場面で現場を見つめている。

小学校で、「それってアートなの」と聞かれる状況があるとのことだが、誰がどんな状況でそのようなことを言うのか。

【漆委員】

学校の先生が多い。学校の先生は、どうしても自分の分かる言葉で、自分が伝えなければいけないという使命を持っているので、自分の中できちんと当てはまるものに収まってくれないと説明ができないということなのだろうと思う。

だから、今まで見たことのないものを見た時に、ある人はそれを拒絶するし、ある人はそれを理解しようと努力すると思うが、それが自分の考えるアートとイコールでなかったら、そのような反応をすることが多い。

僕らからすると、そんなのアートでもどうでも良い。今のこういう状況の中で、どのような感動が生み出せるのかだから、それがアートだという評価を得られなくても良いのではないかというような話をする。先生たちも、ずっと半信半疑だと思う。僕自身もアーティストも半信半疑ではないかと思うような実験的なことをやっていることはある。

【伏島委員長】

おそらく、どうしても教科書的なテキスト、規範と合うかどうかということで、まじめな先生であればあるほど自分を規制してしまうということがあるのだろう。

【漆委員】

特に、僕が関わりの深い現代美術でいうと、今までアートだと思われていることをやっても、彼ら（アーティスト）にとってはしょうがない。今までカテゴライズされていないことをやるのが、彼らにとっての得意な部分というか、それが後々、あれは、あの時期における表現として評価される、アートとして評価されるということになるのではないかと思う。要は、儲かるような絵画を描こうと言ったら、それは分かりやすいが、僕らの場合、グラウンドにみんなで温泉郷を作ろうみたいなことをこの間やったが、「それって、アーティストが来て行っているが、アートなの」と当然言われる。そういう状況からスタートする。それは実は温泉郷をつくるまでもっていく仕組み自体が、その場でしかできないような、学校でしかできないような非常にオリジナリティーのあるものになっていくのが面白い。それはどこかで切ってアートだとか、どこかの断面を見てアートだということではない。もはやアートであること自体もどうでもよくなってくる。ただ、呼んでくるアーティストは、アーティストとしてのプロ意識を持ってやっている人間だということは非常に大事だと思っていて、ちょっと人と違う価値観を提示できる生き方を持った人が学校と一緒にいてくれるということが、状況としてはうれしいことだ。

【伏島委員長】

今、学校の話だが、もし札幌でトリエンナーレがはじまれば、「これはアートなのか」と言われるということと同様のことがあり得る。これは、右か左かということにはならないが、熟度を高めて行かなければならないということはある。

評価の軸はどうあるべきか、そもそも評価の主体は誰なんだ、そういうものを社会の中に育てて行かないと、つまらないかどうかという議論になって

しまう。

【漆委員】

一方向だけの評価基準ではつらい。いろいろな評価基準があるなかで、自分たちが救われるような評価基準があるとよい。あるところから見ると、そうかもしれないが、別の方向から見ると意義があるというようなものをつくっていくことも必要なのかなと思っている。

【伏島委員長】

今の話は、学校だけではない、非常に重要なポイントだ。

誰がどうやってコーディネーターを育てていくか、批評していくか、どう評価するか、評価することは助成とも関わる。助成したものについても評価しなければならない。熟度の問題になってくる。

ここらあたりから、自由な発言を。

【本家委員】

学校の先生は、答えのあるものを求める。私は子供に楽しんで欲しい。一個の作品をつくることにみんなで協力する中で、アート以外の力を養ってあげてと思う。

アートマネジメントのことは一切わからないが、もっとコーディネーターの方がいっぱいいるのかと思っていたら、いないということなので、もったいないと思うのだが、なりたい人がどうやってなれば良いのか。

【伏島委員長】

漆さんは、どうやって今の仕事を始めたのか。

【漆委員】

もともとは、絵描きを目指していた。もっと前は漫画家を目指していたり、音楽をやったりしていた。

しかし、自分が表現者としてやっていることに対して、目的を失うというか、社会という集団の中で、自分が表現者としてやっていくことが本当に意味があるのかと思った時期があった。個展会場で、たくさんお客さんが来てくれて、後片付けをしているときに突然思った。世の中に、自分より出来る人はたくさんいるだろう、だから自分ももっと頑張ろうと言うのではなくて、それだったら、もっとそういう人たちを世の中につなぐことの方に、社会の中で、自分の存在価値があるのではないかと気づいたときがあった。当時は

大学院生で仙台にいたが、ギャラリー、メディアテークなど、最低限の環境は仙台にもあった。アートを社会化すると、そこまで考えていたかどうかは分からないが、アートをもっと身近に感じてもらおうと思ったときに、そういうことをやっている人はいるのかなと考えたら、意外と場所を持っていて待っている、用意している人はいるのだが、自分から外へ出てアクションを起こそうという人はあまりいないということを感じた。それなら、誰もいないのならやるしかないという気持ちで、最初から強くあった。

そこからいろいろなアーティストに声をかけて、仙台の商店街で「路地アート」というプロジェクトをスタートした。長屋のような商店が連なっている横町があって、そのたたずまい自体が面白く魅力的なのだが、お客さんが来ない、明日にはつぶれてしまうお店も何件かでてくるというような特殊な場所があって、そこを舞台に、若い人を中心に芸術家を2、30人集めて、ポートフォリオ（自分の作品集、見本）を持ってお店を訪ねて行って、この店が気に入ったので、ここに作品を置かせてくれないか、という交渉を僕がコーディネートして、アーティストと一緒にいった。商店街全体が会場となり、そこで、ワークショップやったりイベントやったりということをして10日間くらい行ったのがきっかけだ。それ以来、そっちの方が向いているかも知れないという気がした。

今行っている、「アーティスト・イン・スクール」などという事業は、大学院を卒業するとき、修士論文を書かなければならず、論文なのに企画書を書いた（ものが原形になっている。）小学校の空き教室を芸術家の工房とかスタジオとかアトリエとして活用して、そこを拠点に市民のひとたちが、学校に集ってくるような状況ができれば、まず子供たちにとって、小さなころからアートに触れる機会がつけられるということが一つ。もう一つは、学校という環境自体を、もっと市民活動とか文化活動に活用できるということ。小学校が一番可能性があると思っている。体育館、視聴覚室、音楽室、調理室となんでもある。

それは、子供たちの学習のために用意されているのだが、一日の中の半分は何も使っていない。あれだけ活用の余地のあるハードを持っているのに、しかも誰もが6年間通って、自分の子供を通わせれば6年間は関わらなければならない。そのような、地域の非常に重要な拠点であるにも関わらず、そこに文化活動が入っていかないのはおかしいなと思った。過去をさかのぼれば、学校は公民館みたいな状況だった頃もあった。小学校の運動会がお祭りみたいな時期もあった。そういうものを連想して考えたときに、学校が地域のコミュニティの拠点になればいいなと、思い始めた。それを論文に書いて提出したら、指導教官からは論文じゃないと怒られたが、それを北海道でや

ろうと決めて戻ってきたら、いろいろな御縁があって8年位になる。どちらかという、芸術振興というよりも地域振興に近い立場だと僕は思っている。どちらかという、場づくりという感覚でコーディネーションとかプロデュースをしている。

それを自分の会社にして、この4月から一般社団法人にした。このように、どこかに就職して誰かに教えてもらったというよりは、いろいろな御縁の中で、勝手に職業にしてしまったという感じだ。同じようなやり方をしている人はいないだろうと思う。

【伏島委員長】

十勝での活動報告書を見たことがある。そのいきさつを教えて欲しい。

【漆委員】

十勝では、2002年に「デメーテル」という国際展があった。

しかし何も素地のないところに、オノヨーコが来て作品を展示しても分からない。結局デメーテルは続かなかった。その翌年に、「デメーテル」のスタッフとして入っていた方が、「クンスト平原まつり」という新しいプロジェクトを1年間だけ立ち上げた。そのときの問題意識としては、十勝の人たちは全然アートを知らない、もっとアートのことに興味をもってくれる人口を増やすにはどうしたらよいか、地域の人たちの身近な場所に、生のアーティストとふれあってもらう機会を作らなければいけないということで、小学校の夏休み期間中に、小学校の空いている部屋を、実際に展示するための作品を制作するためのスタジオとしてお借りした。そこで制作した作品を実際に小学校でも展示をしたり、クンスト平原まつりで展示したり、パフォーマンスしたりということをして2003年にやられた。その当時は、「アーティスト・イン・スクール」という名前ではなくて、僕もそこには関わってなかった。

その翌年に仙台から北海道へ戻って、その「クンスト平原まつり」を立ち上げた方と知り合って、さきほどの修士論文として提出した企画書の話をしたら、その方は札幌に来て、もう十勝には関われないので、僕に任せてもらうことにして、2年間「デメーテル」と「クンスト平原まつり」でつなげたものを紹介してもらった。そこで、「クンスト平原まつり」の学校で行った部分だけを取り出して、2004年から「アーティスト・イン・スクール」のプロジェクトを始めた。それは、夏休みとかの期間限定ではなく、子供たちが通常通っている期間に行うことを始めた。それからずっと続いている。

【伏島委員長】

帯広には、文化的な素地がないといっても、六花亭がやってきた「サイロ」(月刊児童詩誌)のような活動があったわけで、これは全国でも評価されて、企業メセナ大賞の中の文化庁長官賞を受賞した。六花亭も企業メセナ協議会の準会員から正会員になった。六花亭と勝毎(十勝毎日新聞社)の果たしてきた役割は大きい。

【漆委員】

ただ、一般の人たちは、そういうことも知らない。「勝毎」も森づくりなどで頑張っているし、芸術文化の面でもいろいろと行っているが、それがなかなか一般の人たちのところまで浸透していないという現状が、デメーテルをやったときに露呈した。

「アーティスト・イン・スクール」も、十勝の小学校の中で数十校しか展開できていない。それもどこまでの効果があるかどうかについて、もう一度検証してみなければいけないと思っている。

【伏島委員長】

なぜこのようなことを聞いたかということ、札幌のトリエンナーレのことが気になっているからだ。今どのような状況か。

【事務局】

今、基本計画の大体の素案ができてきて、来月位には発表になるかなという段階。基本計画といっても骨格のようなものだが、今の計画では平成26年にトリエンナーレを行う予定。そうなると、今年すぐにでも実行委員会を立ち上げないと間に合わない。作品の制作を1年位前からお願いしないと、作品もできないだろう。来年には制作依頼することになると思う。

【伏島委員長】

かなり厳しいのではないか。横浜では、間に合わなくなって旧作持ってきたり、総合プロデューサーが途中で変わったこともあった。良い面もあるが、全体としては問題も抱えている。妻有の「大地の芸術祭」はじっくりとやってきて、農民のみなさんも含めて地域の人に関わったという面では評価が高い。ちょっと心配しているのは、十勝の例もそうなのだが、札幌だって大多数は理解が進んでいるとは思えない。小さなスポットでは、アートファンがいたりいろいろな動きがあるかもしれない。しかし、極めてタコつぼ的な状況だと思う。そこにトリエンナーレとなったときに、ものすごいギャップがあるのではないか。結果として札幌市がマイナスの評価を受けたら、今まで

築いてきたものがどうなるのか、先人に申し訳ないという気持ちもする。

私個人は、ものすごく危機感を持っている。そういう意味では、漆さんの発言は重要だと受け止めた。

それと、今ある文化状況、文化行政をどう改善するか、芸術施設の経営戦略が今のままでよいのかという疑問もあると思う。僕らはどうしても学芸員任せで、届けられるものを受け取るという一方通行的な感じがする。もっと可視化して、市民参画をしていかなければ、予算が圧迫する中ではじり貧になるだろう。そのような危機感もある。これからはじまる大プロジェクトにも、良い意味で市民が関わってコントロールしていく。それについての議論もいただきたい。

【野田委員】

今のお話は、市民、ファンを育てるという話とつながりがあると思う。

500m美術館を行っているが、そこでは、地下通路を通行する人が美術作品を見ざるを得ない状況に置かれる。それはすごく有効だと思う。

例えば駅の掲示版のポスターは、見ようと思った人しか見ない。地下鉄駅の柱に巻くように貼ってあるポスターは、非常に目につくし、実際その催しには足を運ばなかったとしても、そういうことをやっている知らせる効果はある。それと、500メートル美術館は近いものがある。

広告ということを見ると、ギャラリーのポストカードが置いてあることがある。あれは、情報が欲しいと思った人だけが取っていく。それが一番ファン向け、その次がポスター、さらに興味ない人にどうしていくか、ギャラリーのポストカードやポスター以外に、もっと目に入ってくるような宣伝媒体にしなければいけないと思う。

トリエンナーレを行うということを見ると、ファンにしていかなければならないのは、ポストカードを手にとったり、ポスターを見たりはしない人たちだと思う。そのような人たちにも、いやでも目につく形にすることが必要だと思う。

さきほど漆さんが、コーディネーターになろうとする人がいるのかという話をしていたが、学芸員になりたい学生は少なくない。調査的なことを続けて行きたい、展覧会をつくりたいとかいろいろな理由だが、アートの良さを人々に伝えたいということで学芸員を目指している人もいる。そのような仕事はコーディネーターに近いのかなと思った。インターンという機会があるのであれば、学生とコーディネーターをつなぐ仕事があると、また広がっていくのかなと思う。

【伏島委員長】

自らは、ポストカードとかポスターを見ない人たちに迫力のあるプレゼンテーションがあっても良いのではないかという提案、その分かりやすい例が500m美術館ではないかということだ。札幌市の担当者もその有効性を感じ始めているのではないかと思うのだが、どうだろうか。

【事務局】

普通の美術館は、行こうという意思のある人が行く。500メートル美術館は、そういう意思の無い人でも、あそこを通る人はみんなが観ることになる。そういうことによって、普段美術に関心の無い方でも、ファンを増やしていこうというねらいが確かにある。

オープンしてから通行量調査を行った。1. 5倍くらいに通行量が増えている。オープン後、見てみようと言う人が増えた効果はあった。

【野田委員】

せっかくおもしろいものなので、これから環境は整っていくということか。

【事務局】

年4回展示替えする予定。その企画も漆さんのようなコーディネーターも入れた実行委員会で企画しようと思っている。

【伏島委員長】

重要なポイントなのだが、動きが見えない。500m 実行委員会の動きは、どうやったら見えるのか。

10年20年トリエンナーレを続けていくとすれば、その仕組みがすごく大事だ。今、準備段階として、そのことを意識した方が良い。より市民化する。

【事務局】

国際芸術展の中に、重要な要素として市民参加プログラムがある。例えばボランティアの方々と作りだすプログラムが重要ではないかと思っている。他都市の例では、学校へアーティストがアウトリーチして作品をつくるという、「おとどけアート」で行っているようなことを行っている国際芸術展もある。そのようなプログラムもやっっていこうと思っている。その際には、500m美術館とかアートステージも市民参加プログラムの位置づけでやれないか。著名なアーティストの作品ばかりではなく、市民参加のプログラムも一緒に考えていきたいと思っている。横浜トリエンナーレの関係者からも市民参加

が非常に重要だというお話をうかがっている。

【伏島委員長】

ボランティアという言葉が、日本語から本来の意味に返っていく状況が必要だと思う。日本ではボランティアが、悲しいかな無料奉仕のような言葉になってしまっている。本来は、自発的に行うというだけの言葉だ。コストを下げるためにボランティアを使うというのが、日本の悲しい現実だが、そうではいけない。ボランティアにより主体的な関わりをしていただくような500メートル美術館の委員会があって、そういう文化とトリエンナーレが一緒になっていくと、サッポロらしくて格好いいねということになる。多分長続きすることにもなる。

トリエンナーレが10年位で終わってしまったら恥ずかしい話だ。その辺のことも含めてより意識的にやっていって、今野田さんが言ったように、文化芸術の露出というか、文化芸術が普通にあるというような市民社会をつくっていく。

去年の安田侃プロジェクトのような、じゃまだなと思う部分がありつつも、うれしかった。プラスの意味があった。そういう具体的な習慣を積み重ねて行くことが大事だと思う。

【田中委員】

漆さんの、アートの子供に対する接し方について、評価の主体がだれかということだが、評価の主体は先生ではないと思う。それを発信しているコーディネーターでもないような気がする。それを感性として受け止める子ども達が主体だと思う。

子供たちが未来の札幌を支えるわけだし、その子ども達を教育、育成することによって、どれだけ芸術に対する意識が高まるかということが、評価の一つの切り口ではないか。試行錯誤や悩みは誰でもあると思うが、自信を持ってやり続けて行くことが大きな成果に結びつくと思う。

立派なことをやっているわけだし、今お聞きしただけでも、子供たちの目が輝く姿が浮かぶ。自分の表現ができるということは、すごく将来、未来がある。私はそれを信じたい。そういう意味で、素晴らしいことなんだと思う。

エルプラザへ用事があって、地下の歩道空間を歩くのだが、いろいろ写真展などを行っているが、音があると足が止まる。たまたまジャズだったと思うが、人だかりができていた。ふらっと見てみたら、みんなのっていた。音はすごく大事ではないかと思った。視覚も大事だし、発信する媒体もいろいろ

ろあるだろうが、五感に訴えるものはすごく大事だと思う。

【斎藤委員】

この街のアートということを考えて時に、すごくたくさん取り組みがなされている。去年いきなり安田侃の彫刻が道の真ん中に突っ立っていたりとか、夏のジャズフェスティバルで渡辺貞夫さんが芸術監督になるとか、芸術の森はあるし、トリエンナーレも始まるっていうし、500メートル美術館もやっているし、演劇シーズンも始まったし、札幌交響楽団はあるし、演劇のはなしだが、学校へのアーティストの派遣も今年から始まっている。民主党政権で、平田オリザが政策参与になって、ちょっとお金がついたということがあって、北海道では採択されなかったが、ぼくらは始めてしまった。このように、ずいぶんやっている。それが機能していないということなのか、その点検がないのか、何かが足りないのか。札幌市は相当やっていると思うのだが、何が足りないのか。

【事務局】

下北沢は演劇の町、宇部は彫刻の町、ある意味、そこに絞れば、それだけでいける。札幌はすごく欲張りで、音楽もあれば、アートもあれば、演劇もあれば、すべてやっているのではないかと。全方位で力をいれている。逆にいえば、全方位でやっているから、限られた予算なので、特定分野へ金を入れることもできにくい。

【斎藤委員】

音楽はマーケットへの流通がしやすい。絵画とか写真とか、一度作ったものは流通させやすい。僕らがやっている演劇は、流通するのにコストがかかり、流通させずらいものだ。再生産するのにものすごく人件費がかかる。

ちょっと後ろ向きな気持ちにもなるのだが、限られた予算なら、そのお金を小学生に使う方がよいのかもしれない。

【事務局】

市長は、子供に対して芸術文化を体験させることに非常に力を入れている。

音楽では kitara ファーストコンサートがある。これは、市内の小学6年生全員に、Kitara で札幌交響楽団の演奏会を聴かせている。これはほぼ100%だ。演劇でも、こころの劇場で、「劇団四季」を市民ホールで小学校6年生に見せている。これは、ほぼ9割。美術分野では、小学校5年生を芸術の森美術館へ招待する「ハローミュージアム」事業と、漆さんをお願いして行って

いる「おとどけアート」との2本立てで行っている。「ハローミュージアム」は、小学校5年生の7割ぐらいまで来ている。市長は、音楽、演劇、美術を、小学生のうちに、すべての人に体験させようとして力を入れている。これは、誇ってよいと思っている。

【斎藤委員】

その子ども達が育った後、学校を出た後のことを考えてみる。アーティストが市民である。市民がアーティストであるという地域をつくりたいと考えるなら、子供たちが学校を出た後に、アーティストになれるような受け皿も必要だ。大人になった人たちがアーティストとしてこの街で生きて行ける。アーティストとして存在できるということを考えることが、多分産業化ということなのかなと思う。

中途半端に行うよりは、子供に特化することを演劇も考えなければならぬし、考えたいと思う。

石狩市の子供劇団を、ずっとボランティアで指導している。16年前からやっていて、育ったOBが高校生になって、小学生、中学生を指導するようになっていく。素晴らしいことだと思う。なにもないところから演劇をつくるというワークショップをずっと続けて、自分たちが持ってきたある絵本で演劇を作って3月に発表した。確かにプロから見れば、いろいろ言いたい部分はあるが、石狩の「アートウォーム」という倉庫の多目的アトリエで公演し、満員だった。北海道新聞の石狩版でも紹介されていたが、学校演劇のように、台本があって、その演技の指導をするのではなくて、自分たちでディスカッションしてコミュニティから作る、コミュニケーションからつくるという演劇を、僕は年に1回か2回しか行けないのだが、そろそろ大人になっているOBが指導している。これは素晴らしいと思う。固定観念の固まった大人を鍛えるよりも、小学生にこういうことをやるということに時間を費やすことも必要なことなんだと、この1カ月くらい考えていた。それで、ちょっと偏った発言を試してみた。

【伏島委員長】

ある一定の文化的素地ができてしまうと、大人になってからは多分変わらないだろう。私の場合、(子どものころに)群馬交響楽団が普通にあった。全国の子供たちが普通にクラシックを聴いていると思ったし、オーケストラは学校に来るものだと思っていた。でもそうではなかった。子供の時に受けるものはすごく大きいので、斎藤さんが、石狩で行っていることはものすごく深い意味がある。さて伝統芸能はどうだろうか。

【荒川委員】

公共施設、文化状況の改善という話もあったが、江別市は、市民ホールがいろいろな文化団体に使わないかというアピールをして、安価で会場を提供している。札幌市はどの公共施設もすぐ埋まってしまうので、そのようなことをしなくても良いのかもしれないが、逆に安く提供するので使ってくれませんかというようなことをした方が、いろいろなイベントが増えるのではないかと思う。

野田さんの言っていた、目に入る宣伝方法ということで、広報さっぽろを利用できないだろうか。CD店へ行くと、「Wii」というライブ情報が載っているフリーペーパーが置いてある。チケット予約のために、それを持っていく人が多い。

その「Wii」みたいに、広報さっぽろがならないかなと思う。

観光文化情報ステーションから、「Weekly Press」を持ってきてみた。こんなに多くのイベントがあるのに市民は知らない。字も小さくて読みづらい部分もあるが、これを広報さっぽろに入れて配布したら、年配の方は広報さっぽろをずいぶん見ているようなので、じっくりこれを読みこんで、このイベントに行きたいと思ってもらえるのではないか。

また、斎藤委員から、札幌市はいろいろな取り組みがあるというお話もあったが、邦楽分野については、札幌市はきついと思う。中学校では、今、柔道やダンスが取り入れられると言われているが、邦楽も必修となっている。三味線、琴、太鼓も含めて民謡も必修で、高校では、邦楽を3年間に一回は見なければならぬと学習指導要領に書いてある。札幌市の高校で、邦楽を見せる機会を設けてくれるのか、全く分からない。札幌市ももう少し邦楽にも目を向けてくれると僕らのジャンルもありがたいと思う。

【斎藤委員】

札幌市にはいろいろなジャンルがあって、舞踊もさかんだ。ジャズダンスにしても、バレエにしても。コーディネーターということを考えても、現代アートのコーディネーター、美術のコーディネーターがいるのだが、コーディネーターが何かの特化していることが多い。いろいろなジャンルを横断したコーディネーターはあまりいないのではないか。

例えば、500メートル美術館に太鼓のブースがあるとか。通り過ぎる人は太鼓を聞かされるというような。ジャズの人がいるとか、弦楽室内楽があってもいいじゃないかとか。

この会議の報告書を読んだ人の中には、なぜダンスの分野の人がいないのか言い出す人がいる。そのような人がいるので、行政の人にも配慮しなけれ

ばならなくなる。そうすると満遍なく行うということになる。ある特定のジャンルではなく、ジャンルを横断できるコーディネーターが必要なのではないか。

【伏島委員長】

個別にはいる。ところが目配りもできて、しっかりとした評価軸を持ってかわっている人は意外に少ない。

学芸員も含めて、アートコーディネーターになりたい人はいる。しかしその機会がない。そこで、日本人得意のOJT（on the job training、現場で仕事を行いながら研修すること。）ができないかというのが私の長年の夢だ。例えば、Kitara が市民向けプログラムを企画する。全部 Kitara のスタッフが作って終わるのではなくて、そこに、インターン的にある学生を入れて、修論書くついでにその事業を担わせる。全部は担えないだろうから、担当者と一緒に、漆さんからもサポートしてもらって作るようなことが普通になって欲しい。ぜひ一つの方策として検討いただきたい。20代からやっていたら、結構いろいろなことができると思う。

5月6日に、市民ホールで「新たな挑戦、New Contemporary Danse II」という道内のコンテンポラリーダンスの催しがある。これはなかなか良い企画だと思うが知られていない。このように、普通に良い仕事をしている催しの情報に接する機会がすごく少ない。さきほどの「Weekly Press」もすごく良いのだが・・・。

【荒川委員】

これは、置いているところが限られているので。

【事務局】

発行部数もそんなに多くはない。発行部数を増やすとなると、予算のことがあるので、ただ、ホームページで見られるようにはなっている。

【伏島委員長】

お金をかけないで良い仕事にできることはあると思う。

可視化されて、もっと分かりやすくなって、そこにコメント、三行広告みたいなものがあると非常に分かりやすくなる。これはどの街もやっていない。枠組みを作れば、自発的にやれるのではないか。

【事務局】

アートセンターの提言の中で、「アートソムリエ」が盛り込まれていた。「アートコンシェルジュ」も同じものだと思うのだが、さまざまなアートに関する情報を熟知していて市民に紹介できる人だと思うのだが、膨大な数があるので、そのすべてを熟知できるのかという問題はあるのだが、そういう人が求められているのだと思う。

【伏島委員長】

ボランティアが10人から20人もいれば、もっと可視化できると思う。それがないとマーケットの拡大に結び付かないので、取り組んで欲しい。

【斎藤委員】

「Weekly Press」は、どんな催しも同じスペースで羅列してあるのか。

【荒川】

劇団四季も、音楽関係のメジャーアーティストも載っている。公共のお金をかけて載せるのはどうなのだろうか。

市民団体とか、中央図書館で行っている読み聞かせの会も載っているが、そういうのをいっしょに載せるべきではないのではないか。

【伏島委員長】

ここまで進んだのは評価しなければならないが。

【事務局】

これは、市で名義後援したものとか、申請があったものを載せている。

【漆委員】

それは、目的によるのではないか。単純に札幌市でこのような催しを行っているという事実を情報公開し、目に見える形にすることが最大の目的であれば、これで良いだろうと思う。しかし、参加させようとか興味を持たせようというのであれば、このような体裁であれば効果は薄くなるだろう。

目的が、これだけのボリュームが札幌ではある。興味のあるものについては、詳しくは自分で調べてくださいというのであれば、この程度でも良いのかもしれない。

子どもがいる人から見れば、メジャーミュージシャンよりも読み聞かせの会の方が大事かもしれない。それはやはり主観であって、誰かが選ぶべきものではないのかもしれない。

何かを選ぶと、何かを削ることになる。それを選んだということに責任が取れない。その責任をとってくれる人がいて、その人が選んだものなら良いということにするのか。その見せ方について暗中模索なのか、まずは表に出すことが第1ステップだということであったのなら、それはそれで、一つの形なのだと思います。

【斎藤委員】

行政は恣意的にはできない。

【事務局】

行政だけではできない。もしそれをやるのであれば、あらゆる分野の専門家を集めて審議会を作って、その中で選択していただくことになるのだろうが、この情報は常に更新しているので、そのたびに大勢の方に集まってもらって審議していただくことはなかなか難しい。

【漆委員】

週1回発行なら、なかなか大変だ。週1回出すくらい、札幌市内でいろいろな催しがあるということか。

【伏島委員長】

この良いところは、掲載を拒まないこと。その意味では公共の論理は通っている。すべて平等、ただし論評はしない。そこに、アートコンシェルジュなどの市民が関わって責任を持つ。これは、Aさん、Bさん、Cさんが担当していますというようにすればよい。全国の政令市の中でも、札幌はここまで進化している。この次にどうするかだ。

【事務局】

これは、「アートステージ」で行われる催しを紹介するためにつくった。やってみたら大変好評だったので、常設化して、札幌市内で行っている他の行事も載せることにした。結構需要はあると思う。

【斎藤委員】

あとは、これをどう恣意的に使うか。

【伏島委員長】

それぞれの市民の仕事だと私は思う。普通の市民だとなかなかできないの

で、ある程度訓練された市民。それはまさにアートコーディネーター的な役割の一つだ。

【斎藤委員】

複数必要かもしれない。出す情報自体も、受ける側が比較できるように。

【伏島委員長】

それをやりたい。批判ではなく批評ができるようになる。

確かに全方位で延びちゃったところもあるが、すごく良い仕事を札幌市はやっているわけだから、それをさらに進化させると、ますます豊かな文化的な暮らしが出来るようになると思うので、このようなことを話している。

【井出委員】

今日は、すごくわくわくするようなお話が多い。Kitara に子供たちを招いて、オーケストラ演奏を聴かせることは素晴らしいことだと思う。またその前段階として、彼らに選ぶ、感じさせる、体験させるということをしているのが、漆さんのやっているお仕事なのだと思う。

それは美術であったり、音楽であったり、演劇であったり、そういうサポートを今私たちが一番しなくてはならないことではないかと思う。

どこにお金を使うかと考えたときに、子供たちに体験させる。その中で、音楽に感じた子ども達が音楽に特化する、美術に感じた子どもたちが美術に特化する。演劇に特化するとか、そういうことを、子供たちに選択させる環境づくりが大切ではないか。漆さんのお話を聞いていて、素敵なことをなさっていると感じた。

札幌市は、アーティストバンクを実験的にスタートなさっているが、演奏会場へ行って演奏することも大切であるが、アーティスト達は、何のためにそこへ行くのかという、ミッションをしっかり持たなければならないと思う。

現場で漆さんがなさっていること、斎藤さんが子ども達と接点を持って表現のトレーニングを行っているようなことが今必要なことで、それが次世代につながり。5年後、10年後に、もしアートセンターができたときにそれが生きてくるのかなと感じている。

【伏島委員長】

シナリオは見えてくるような気がする。中間整理すると、札幌の子どもたちには肌で感じるような体験を、いろいろな分野で過不足なくできるようにする。

太鼓の経験は、今の子どもたちは少ないと思うが、大人みんなが世話してくれる夏祭りがあったら、太鼓をみんながたたける。

オペラの発声は難しいから分からないが、まず体験があって、それがシリーズ化される。それが第一点。中学生なのか高校生からなのかは分からないが、次の段階で、基礎レッスンを望むひとには共同でそれを提供する。演劇でも、文学座、札幌座、それぞれのメソッドがあると思うが、そのメソッドに入る前に、声の出し方や体の動かし方など、ごく基礎的な共通するレッスンは必ずあると思う。このような演劇の基礎訓練を行う場は、ヨーロッパには普通にあるが、明治期に、上野に美術学校、音楽学校はできたけれど、演劇学校はできなかったのが日本にはない。それを、札幌では最低限の基礎レッスンは受けられるようにする。

肌で感じる体験と基礎レッスンの共同化くらいは、札幌の場合は提供できるようにしてあって、それを市の財政ですべて行うことはとても大変なので、いろいろなOB・OGたちにボランティア的にサポートしてもらおう。使う施設については、10区の中で空いている施設もあるので、それを区でお世話する。その辺のシステムは、それほど大変ではないと思う。中間的に、ぜひ市の方で検討していただけないかなと思う。

【伏島委員長】

前回、ミッションという言葉もでた。札幌市は、北海道の中で果たすべき役割がある。コアは180万人だが、さらに札幌圏、北海道と広がる。

【漆委員】

質の向上、普及、子供たちの教育、全部そうなのだが、ある特定の分野のものを伝えたい、広めたいと言う目的で、それに携わる専門家は、札幌の中でたくさんいる。斎藤さんのお話して、横断できる人間は少ないのではないかというお話しがあったが、まさにその通りだと思う。ただし、ある分野について、どこかにつなげられる人はたくさんいるかもしれない。横断出来る人が一人いると、じゃあそういうことやりたいのなら、この人がいるからおれの専門ではないが、紹介しようかとなる。僕はそういう立場に近い。芸術文化系の分野の範囲ではあるが、美術よりのかた、ダンサー、演劇の方など、いろいろな分野の方と仕事をする事も多い。僕にはこだわりがない。なぜかというと、僕はある特定の分野を世の中に還元するとか、知らせる言うことではなく、場をつくるということが目的だから。場をつくる上でどういうものが効果的に働くのかと考えた時に、それは、もしかするとそのときそのときによって違うものかもしれない。あるときは太鼓かもしれないし、オ

ペラかもしれない。またあるときは絵画かもしれない。演劇かもしれない。

まだまだ実績としては少ないと思っているのだが、いろいろな人たちとジャンルを超えてお付き合いさせてもらってきた。その結果、学校の先生とどんな芸術に興味があるかと話をしたときに、「よく分からないけど」と始まることが多いのだが、例えば雪を使って何かをやってみたいなというような、漠然としたオーダーがあったときに、それだったら雪を素材として作る造形系の人かなとか、「子供たちが、もう少し自分の思っていることをアピールできるようにする、というようなものにつながることはできないか」ということであれば、もしかすると演劇分野かもしれない、ということも考えることもできる。僕はそれを教育行為だと思ってやっているのではなくて、結果的に教育に繋がれば良いと思ってやっている。そういう場が出来あがること自体が、いろいろな人に影響を与えるだろうと信じて場づくりを行っている。それができるのなら、どんな分野の人でもよい。

美術のアートマネジメントを行っている人で、学芸員、キュレーターと言われる人がいる。キュレーターはアートの専門家ではあるが、別にコーディネーターというわけではない。しかしいろいろなアーティストを知っていて、パイプもある。ということは、僕が一人のキュレーターとつなげることができれば、そこから100人のアーティストとつなげる可能性があるということ。そういう意味で他の分野を横断するということと同時に、同じ専門分野の中でも、繋がり方、僕がアーティストだけとつなげるのではなくて、もっとキュレーションを行う人とつなげるとか、そういうような形のパイプ作りが求められているのだと思う。逆に、目的の持ち方によって、コーディネーションの幅も変わってくるということだろうか。その辺を勘違いすると、全然別の状況になってしまう。僕は、斎藤さんが言ったような横断できるコーディネーターになりたいし、そこを目指しているつもり。

僕をコーディネートしたり、僕がコーディネートするコーディネーターがいてもいい。コーディネーターというものの、それぞれの持っている目的の違いというものを、もう少しアートマネジメントの世界の中でも整理したい。専門分野があるならそれはそれでやっていくべき。僕は、本来別の目的があるわけだから、専門性を持ちすぎてしまうとかえって良くない。その辺が違つかないかと思い、自分のコーディネーションというものを整理してみた。

【伏島委員長】

今のお話は、かなり、斎藤さんの言った横断型コーディネーターとつながると思う。それは、浅野さんの出してくれたアートセンターの具体的な役割。私流に言うと、繋がる場だ。アートセンターの大事な機能の一つは、具体的

に人と人がフェイストゥフェイスで繋がる場。漆さんのようなコーディネーターが複数いる。田中さんのような強力なボランティアがそこにいる。まさに自発的なボランティアがいる。そのようなことを意識して今から始めても良いと思う。結論的に言ってしまうと、この円卓会議はその準備機関でもあると思いたい。来年3月で終わってしまうのだが、その後は、アートセンターを滅茶苦茶意識した、アートセンターが建築される前に、ソフトができていたみたいな、この円卓会議がもっと発展した形で、具体的なコーディネーターがいて、月1とか週1とかどこか間借りして、それ位の形でスタートして良いのかなと思う。

【事務局】

ハードはまだまだ時間がかかる話なので、ソフトが優先していく形になると思う。

【伏島委員長】

もしみんなの気持ちが高まっていけば、上田さんに中間報告したいくらいだ。

【漆委員】

ポータルサイトがない。状況として、ホームページを持っている人はたくさんいて、それぞれおもしろいことを行って、もしかすると質の高いものもあるのかもしれないが、そういうものを札幌の文化として紹介できる、非常に優秀なポータルサイトがないのかもしれない。

【伏島委員長】

一度試験的につくったら、ずいぶんいろいろな人が集まるだろう。例えば、ジャズの冊子を一人で出している人がいる。クラシック分野では、解散してしまったが「ゴージュ」の人たちがいる。演劇関係がかなり盛り調子なので出てくる。それと、みなさんとお仲間の方がいる。この指とまれで月1くらいなら、今でもそれは可能だと思う。そこに、学生の論文も書きちゃうというようなボランティアがでてきたりして。

【事務局】

先発的にソフト優先でやっていかなければならないと思うが、行政がそれをやれというのではなくて、市民が中核を担ってやって欲しいと思う。例えば、演劇なら、市民がお勧めの演劇は何だとは言えても、行政が、これが良

いとは言えない。

行政は責任をもたなければならないし、公平性をもたなければならないので出来ないが、何人かの専門家がそれぞれのお勧めをあげて、その中から選んでもらうという形であれば民間ならできる。そういうことをやっていくのは面白いかなと思う。

【伏島委員長】

行政には継続性と非継続性がある。明文化されていれば、やるべき義務がある。ところが人事で変わってしまう。人的な関わりの要素が小さい。それを、信頼できる民間の人たちに委嘱しておけば、ある程度は継続される。それをうまく使ってほしい。行政の持っている得意分野と市民セクターの持っている得意分野と。

【事務局】

新しい公共という考え方はそういうことだと思う。そういうことを担えるNPO というか、そういうものが中心になって欲しいといわれていると思う。

【伏島委員長】

これまでは、市民、行政、アーティストとばらばらにされてきたのだが、行政と市民の中間的な組織がアートセンターのイメージだろう。

そこで活躍するのがコーディネーターで、彼ら彼女らが、アーティストと中間組織を結ぶとか行政と結ぶとか、新しい役割もでてくると思う。

それと広報の得意なコーディネーターというのも出てくると思う。より低いコストでよりの確な情報を市民に伝える人脈と技術をもったコーディネーター。

それと、大事なことは、中間的な組織には企業メセナが関わらなくてはならないということ。企業メセナはお金だけではない。人を出せるかもしれないし、場所を貸せるかもしれない。冠をつければ、少しは広告宣伝費を出せるかもしれない。企業メセナがしやすくなるような仕組みも考えた方が良い。

【斎藤委員】

なでしこジャパンの選手を雇い続けるのも企業メセナだ。演劇でもそのような企業を探している。僕らを支えてくれている会社の社長さんに、仕事はまじめにやるので、僕らの劇団員を雇って、午前中だけ仕事することにして、全部の給料とは言わないけれど、ある人件費をそこでだしてもらおう。それでも、アルバイトしているよりはずっと良い。そして、ツアーに行くときには1

カ月休ませてもらって、ツアーから帰ってきたらまた職場があるということが実現できたら、若いやつらは続けられる。

スポーツの分野では、実業団のような形で実現している。アートでもそのようなことができないか、そのような議論が始まっている。

【伏島委員長】

これからは高齢化社会だ。札幌は一見中央区一極集中でやりやすいかもしれない。でもこれからはそうではない。だんだん中央区へ出かけることが億劫になる。それで、区単位での文化行政も必要になってくるし、どうしても市民ホールでやらなければならないこともある。そのときに、足をサポートするボランティアに、バス会社の退職者がボランティアになり、バス会社がごく安くバスを貸しだしてくれれば、お芝居を観に行く足が確保される。このようなことができれば、これも立派な企業メセナだ。札幌方式であり得ると思う。

また、文化施設の経営を考えた時に、みんなまだまだ閉じこもっているの、旭川が進めているようなことを視野に入れてほしい。

国の重要文化財の旧旭川偕行社を使った、「中原悌二郎記念旭川市彫刻美術館」が3年間の大規模改修工事に入る。そこで、JR旭川駅に「中原悌二郎記念旭川市彫刻美術館ステーションギャラリー」を開設し、その収蔵する彫刻作品を展示することにした。

札幌の芸術の森美術館も彫刻美術館も膨大な収蔵作品を持っているのだが、その利用については、全部学芸員任せだ。それをどううまく使うか、そこに企業メセナとボランティアをうまくからめれば、芸術の森美術館が10区でミニ巡回展を行える可能性がある。例えば手稲なら手稲区で実行委員会をつくってやればよい、お芝居もオペラもそうだ。30分、40分の小さなプログラムなら、企業もお金をだせるかもしれない。もっと柔軟に考えられないか。

【事務局】

例えば、アートセンターの中で先行してコーディネーターをつくって、そのコーディネーターが小さなプログラムを民間と行政といっしょになってつくっていく。それが、将来のアートセンターの核になっていく。それはすごく素晴らしいことだと思う。行政としてもお願いしたいことだと思っている。

【伏島委員長】

それが文化資産となる。

【事務局】

アートコーディネーターもOJTの中でしか育たない。実際に事業を作っていく中で育っていく。

【伏島委員長】

今度の札幌座の中でやってみないか。若い人を育てるのは手間がかかるが、やれたら、おもしろいと思う。

【漆委員】

毎年必ず、1人2人、論文を書きたいと、僕のところに来る人がいる。こちらからアプローチすることはもちろん必要だが、自分で探してくる人間は、ちゃんとやっている。

札幌の人、北海道の人の気質みたいなことから言うと、例えば自分の作品ファイルを持って、自分からアプローチしてくる人というのは余りいない。

僕なんか、越後妻有にいたり、人からの紹介でいろいろ観に行ったり、アーティストに関しては外から呼んでくることが多いのだが、他の札幌での企画なら、札幌ならではとか、北海道ゆかりのアーティストを選ぶとかが多いと思う。

自分から積極的に出てくるわけではないのだが、札幌ゆかりのとか北海道ゆかりのとかのキーワードが結構多いので、意外とそれで満足してしまうという雰囲気は何となくあるという気がしている。外からの風を入れることへの抵抗感が、意外と札幌にはあるのかもしれない。結局人が育たないとか、これだけの情報があるはずなのに伝わっていかないというのは、作ることに対しては一生懸命になるのだが、意外と自分から発信することに対しては億劫というか、それを人に伝えたり、情報として発信したり、共有するということが、意外と少ない。下手だということではないと思うのだが。

【斎藤委員】

本当に下手だと思う。例えば、東京の劇団も札幌の劇団もホームページを作っているが、札幌の劇団のホームページは情報がよく分からない。所属する劇団員の顔写真も載っていない。東京の劇団は、それぞれの団員の顔写真、プロフィールが載っている。それは、別にお金のかかることではない。そこまで、貪欲ではないということ。

【漆委員】

多分貪欲ではない。ハングリーではない。

【斎藤委員】

割と不思議な自信がある。外からの情報にも、もう一步貪欲になれば質が向上していくはずだ。

【漆委員】

僕も舞台芸術系の方と北海道教育ネットという事業を立ち上げた。文科省の事業採択は受けられなかったが、独自にいろいろやっている。そういう機会を強制的にでも作らない限りは、余り情報の発信をしない。僕が事務局を行って、「ホームページ作りましょう、みなさん情報を送って下さい」と言っても、なかなか送られてこない。そういうものを作っても発信できない。もう少し貪欲に、こういうものができたのなら、こういうものを載せてくれというようになれば、どんどん底上げされていくはずだ。その辺の気質は、自分を含めてまだまだ足りない。本当に広めようとしているのかというところは気になる。

【伏島委員長】

これは、アートを作る側と行政の双方にある。例えば愛媛ゆかりのといえは、反対する人はいない。これは、東京でもどこでも同じだ。それはそれで良い面もあるだろう。例えば、青森県立美術館には、青森県ゆかりの作品がそろっているから、それはそれで見ごたえはある。しかしそこでストップしてしまうと、血の移入がないことになる。質を高める議論とも重なっていかない。われわれも、自分も仲間もかわいいので大事にしなければいけないのだけれど、あえて、外から血をもってくることも意識的にやった方がよい。

【漆委員】

外から来る人は、ハングリーな状態で来るから、ある意味けつをたたかれるようなことがある。

【伏島委員長】

しかし、「アーティスト・イン・レジデンス」というようなことをやっているが、全然社会化されていない。

関係者だけで集まっているのであれば、それはないだろう。

【斎藤委員】

例えば、僕の知り合いの一流のダンサーがワークショップのために、講師

として招へいされたとする。実は普段はこんなにもらっていないよというくらい報酬をもらって、ダンスのワークショップを行って帰ってしまう。問題は、彼とこのアーティストを繋げる誰かがいないと、彼のやったことがもう少し継続しないと、何かが残らずに、むこうにお金を渡して終わってしまうということ。彼とつながるあるレベルのアーティストがいて、ここでそのアーティストが継続してやらなければならない。一流のアーティストをただ呼んでくるのではなく、中央水準の判断基準を持ったアーティストというのがもう一人必要だ。

【漆委員】

東京など、競争相手がたくさんいるなかで揉まれている人間のある種の表現が、一つの基準として質が高いとするならば、そういう人間を呼ぶことは重要だ。しかし、ワークショップで終わってしまうことが多いので、せっかくそういう人が来ているので、札幌にいるアーティストと一緒に何かに取り組めるようなプログラムをつくったりというコーディネーションをすることがあれば、もっと可能性が広がると思う。

【斎藤委員】

そのもう一人が、例えば札幌で、外からアーティストを招へいしたのであれば、政令指定都市としてのミッションとして、それを近郊都市にも広げる。そのような人を他の全道の中核都市などにも増やしていくようにならないと、産業化にはたどりつかないのではないかと思う。

それを、20年やり続ける覚悟があるのか。今の小学生に教育的アプローチをしていく。芸術と観光、芸術と教育、もうひとつ、ふたつあって、ようやく産業化につながるだろう。マーケットと芸術をつなぐ流通ということを考えたが、産業化するために、もうちょっと具体的な言葉にならないか。今日の議論で結構動いてきたような気がする。

【伏島委員長】

余り金をかけないで、何かを起こすことができないかということを考えている。

それは、私がケチだからということではなくて、相手もそれを待っているということでもある。例えば、芸術の産業化を考えたときに、札幌交響楽団は文化資産だ。もっと国際的に働いてもらいたい。そうなれば、彼らの収入も増える。その分補助金を減らすという話はしないで、この分は自分のものにしていいからというしくみをつくれれば、彼らはもっと稼ぐと思う。

例えば、毎日のように狸小路に台湾の人が来る。あの人たちに札幌を聞かせてあげたい。例えば名曲シリーズ、これなんかコーディネートしやすい。北大の留学生に頑張ってもらおう。それを札幌事務局がコーディネートする。コーディネートすれば、彼らも働ける。本国の人たちと交流もできる。演劇は少し始めている。それだけでも違う。

上海から来た人、北京から来た人、それほどみんながオペラを見ているとは限らないので、そこに字幕を付ける。

私たちも、韓国から来た芝居は普通に字幕で見ている。コーディネートする人がいて、頑張ればできる。オペラでもできるかもしれない。

また、中国の子供たちが太鼓の体験ができるかもしれない。そこに第三者がかかわることによって、いろいろなことがはじまると、産業化ができるかもしれない。

【田中委員】

北海道は全国的に見れば、東南アジアから来る客にとっては、一番の魅力があるわけではない。東京、大阪、京都が一番だが、4番目、5番目には入っている。彼らは自分たちにはないものを望んでいる。日本的なものであったり、雪であったり。彼らはスキーはできないが、そりだとすごく楽しいとか。私たちがどうでもよいようなことを、意外に価値として認めている。

中国から来ても、パックで来ていて、パックからはずすということがなかなかできないので、そのコースの中に組み込んでいくという形を取らなければいけない。そうするとコーディネーターが必要だと思う。

ロケ地として、北海道がかなり使われているので、彼らは、自国で、映画とかテレビで北海を見ている。それで、富良野等に行きたがる。そういうところにあこがれている。

また、日本では当たり前前なのが、中国では当たり前ではない。

例えば、マナーでも、包装ひとつとっても日本人は丁寧だ。そういったものに、彼らは価値を感じている。

だから、狸小路の店で、彼らが何を買っていくか。包装がきちんとしていて、大量に買っていくので、軽量であること。良く売れるのがアイヌのもの。浴衣も大変好きでよく買っていく。東南アジアの人だけをターゲットにしているわけではないが、アートと観光をコーディネートするということは、将来に光が当たる部分だと思う。

【伏島委員長】

京都でもなければ浅草でもない札幌の文化がある。上海の年収500万円く

らしいの4人家族が、札幌でスキーを楽しみ、札幌を聴いて、北海道のおいしい料理を食べる。これが良い旅行のコースだというようにさせたい。十分勝算があると思う。浅草ではできない、京都ではできないものが札幌にはある。

【田中委員】

それを魅力的に感じているらしい。北海道はけっして雪だけではない。彼らは、生ものはなかなか食べないが、お鮭だけはおいしいといって食べる。だから、よくよくリサーチしてみると、宝の山がいっぱいあると思う。

【伏島委員長】

今回は、私と事務局の方で、これまでの議論を整理して、そのうえで皆様に御案内をだして、今回は、認識論から、こうしたらよいのではないかと、いうところに少しずつ入っていきたい。